終戦・抑留・引揚

私の戦争体験

水野恭子（四七）

私は昭和十九年生れ、自分自身が戦争体験をしたのではないのですが、満州からの引揚者として、母の苦労や両親の苦労を思うとき、どうしても書いておきたいと思いペンをとりました。戦争は、戦場で夫や息子を失った悲しみの他にも、いろいろな苦しみ、悲しみをもっています。私は今も残留孤児のニュースや新聞報道をみる時、人ごとと思えないくらい悲しい気持ちになります。母はなかなか口に出して言わなかったのですが、私が少しずつ聞きだすとポツリポツリと語ってくれました。

私は昭和二十年九月、一歳半の時に奉天から博多港に引揚げてきました。当時は栄養失調で病弱な私は、病人ばかりの船に母と一緒に帰ってきたそうです。父は別の船で帰ってきましたが、その時代は政局不安定で、いつ、船は沈没するかわからないというのが、当時の実状で母は毎日博多港へ私をおぶって迎えに行ったと言います。

その母の思いを思うと本当に胸が苦しくなります。やっと会えて三人の家族は、貧しい中にも心豊かな生活でした。着のみ着のままで、何もないまま、親戚の家にお世話になり、その後、引揚者住宅で暮らしました。その住宅ときたら、バラック建ての床は薄い板一枚で、その上にゴザが引いてありました。トイレも共同便所でした。しかし、引揚者住宅の人達は皆いい人ばかりで、畑をしたり、にわとりを飼ったりして、私は結構、楽しく過ごしていました。しかしわが家の生活は大変で親類から着物と交換に、野菜やお米をもらいに長い汽車に乗り、また長い距離を歩いて荷物をも

って帰ったのを覚えています。

ところで父は軍属として中国に渡ったので、比較的早く日本へ帰ることが出来たのですが、今、残留孤児と言われている人々は、満州開拓団等で、行かれた人達だそうです。日本の政府は、戦争が終ったにもかかわらず、少しの船しか出さずに多くの人達が帰れずに残ったのだと聞きました。お国の為とまじめに働いていた人達を無残に扱う日本政府に本当に腹立たしく思います。

今、また、自衛隊の海外派兵が平気で、自民党の口から言われています。私は本当にこわい事だと思います。自衛隊が海外へ派兵するような事になれば、まず国家公務員その付随する仕事で民間の労働者も行く事になります。私はどうしても許してはならないと思います。

私が中学校で社会を勉強した時、母に「何故大人は戦争に反対しなかったの」とよく聞きました。母は「そんなもの言えるような世の中じゃなかったもん」と母は言いました。今はあの時と違います。戦争反対、平和憲法守れ、自衛隊の海外派兵反対を大きく叫けぼうではありませんか。私達の子供の為にも!!

（大住ケ丘在住）

戦後44年に舞鶴市に慰霊碑が建立。戦争の傷跡は今なお消えない。

青いみかんの想い出

大浦明美（五五）

毎日放送テレビ「万里の長城」を観る。瀋陽・鴨緑江など懐かしい字が、響きがきこえる。横にいる夫や娘にその地図を指して「私ここからここまで歩いたのヨ。」と話しかける。「フーン」二人共それだけ…。この間まで引揚げの思い出話の相手だった母もこの三月他界してしまった。

電灯もラジオも、もちろんTVもない今の世の中からは想像も出来ない、でも海産物の豊富なのんびりした荘河という北満の田舎町で私の八月十五日は来た。国民学校三年生であった。その夜からその生活は一変する。日本からその町の警察に派遣されていた父は機密書類等を一晩中、前庭で燃していた。

明けて八月十六日から、満人の襲撃がはじまり台所の板一枚まで、略奪されてしまった。日本人に抑圧されていたものが、一気に吹き出した光景であった。

しばらくして何故か私達は、大連に近い小さな町の小学校の講堂で共同生活をしていた。そこには毎夜、ソ連兵が、若い女をあさりに来た。女の人は、すみを顔にぬり、腰をかがめて、老人のふりをして難をのがれていた。やがて、それぞれにジャンクという塩運びの小舟をチャーターして、各地に散っていった。私達は、渡満した最初の土地・アカシア並木の美しかった安東という町に、逃げのびた。住居は安東旅館、旅館とは名ばかりの今でいう木造アパートであった。ここで父は身分をかくし、全員が偽名を作り、ひっそりとした売り食いの生活をする。ショーユを売りに出る父、たばこ工場でたばこを巻いたり塩味の大福餅を売りに出た母と私、そんな生活が数か月続いたある日、全員

が競馬場に連行された。そこで身元の割れた父が、数丁の機関銃にとりまかれてしまった。そしてまさにそれが火を吹かんとした時、人ごみの中から現れた中国人の「この人悪い人じゃないヨ。」という一言で一命をとりとめたのである。競馬場の馬小屋でふるえていた私達は、この話を戻って来た父からきかされた。

やがてこの場所から十里四方追放の命が出た。寒風吹きすさぶ二月のある日、トウサンジョーという所の遠い親類を頼り馬車での逃避行がはじまった。

ここでの生活は、半年余りだったろうか、農業の手伝いをしたり、割とのんびりした日々をすごした。

そして夏もすぎようとしたある日、帰国命令が出た…。が、戦火でズタズタになった村々には、交通機関は皆無であった。私達集団は、線路伝いに山を越え河の中を渡り、一日三十キロ余りを行軍する。一週間余りのその間には、道端に捨てられて、中国の土となった人も少なくない。京都（中国の）金せい・奉天・コロ島・この道中が、引揚げる時の私の一番苦しい想い出のように思われる。

奉天でのある日の夕方、井戸のそばで立ち話でもしていたのか母があわててもどって来た。「おにぎり十個と娘さを替えてといわれたヨ…。」その頃日本人の娘は、評判がよかったらしい。もしその時中国人に貰われていれば、今頃、中国残留孤児として、新聞に出ていたかも知れない。

コロ島で船に乗った時はさすがにほっとした。博多までは一週間であったが、船に、チフスが発生し、上陸まではなかなかであった。

昭和二十一年十一月も末のことであった。中国の冬は雪は少ないが、零下四〇度にもなり凍土の世界である。博多湾から眺めた日本の山々の濃い緑、船内で配られたまだ少し青みの残った日本のみかん。その新鮮さは、今も青いみかんの季節になると、博多のあの日に帰る思いがする。

（花住坂在住）

旧満州開拓移民の悲惨な引揚げ

松村敏雄（六四）

私は、昭和十四年、小学校六年生の春に、父が南満州鉄道に水道技術員として派遣されたことにより、ウラジオストックにほど近い、豆満江に接する町、会寧の地に赴き、ここに住居を定めた。そして、終戦の昭和二十年八月まで過ごした。

私も満鉄（後に朝鮮総督府交通局となった）に籍を置いていた関係から、終戦時には、鉄道整備の目的とかで残留を余儀なくされた。終戦から日本内地へ引揚げまでの間の見聞したことを綴ることとした。

一、日本の敗戦によるソ連軍の満州から北朝鮮への進駐

八月十日前後と思うが、山越えに港町が、さかんに燃える様子が見えた、あとでわかったことだが、ソ連軍が艦砲射撃で町を焼いていたとのことであった。確かな情報が入手できないまま、八月十四日と記憶するが、とりあえず客車、貨車を動員して、すべての日本人は南下することにした。

八月二十五日頃には、北緯三十八度国境線が設けられたことを知った。何ら為すこともない我々青年鉄道警備員も、一度は三十八度線突破を試みたが、国境に立つソ連軍歩哨に手向いもならず、また北の町、威興に戻った。

二、旧満州（現中国東北部）から多くの日本人の南下

元満州開拓移民の家族が続々と南下して来て、威興周辺の元遊廓や元日本人小学校の教室にゴザを敷いて起居していた。私もこの中の一人であった。食糧といえば、どこから配給されたのか大豆ばかりの飯で下痢ばかりした。この大豆も欠乏し、寒さと飢えと、シラ

ミが媒介する伝染病の発疹チフス等で、バタバタと死人が続出した。暖かい日に山に大きい穴を掘っておき、莚で巻いて大八車に積み重ね運んでいた。

最悪であったのは、娘さんといわず、人妻といわず、女とみれば、昼夜の別なく、ソ連兵は銃で嚇して連れて行く。消炭で顔を黒く塗っても駄目だった。時計や万年筆は、強引に、むしり取られた。ソ連兵の悪いことといったら例えようもなかった。

当時、私は同じ鉄道員仲間と現地人の作男として住込み、稲刈り、山仕事をして、かろうじて飢えを凌いだ。

三、日本内地（我々は故郷日本の地を内地（ナイチ）と呼んでいた）へ帰りたいと望む日本人を何故零下三〇度にも達する寒冷の地に留め置いたのか

ソ連軍令部の意図はわからない。

四、残留日本人の悲痛を思う

今も中国東北部に残留の日本人が数知れず望郷の念断ち難く暮らしておられるのを報道で知る。難を逃れて南下する途中、足手まといの幼ない我が子を一人、二人と涙ながらに現地の人に渡し、自らも南下しながら内地に帰り着くまでに飢えと病に倒れ、尊い命を異郷の地におとし、何とも例えようのない悲惨さである。

五、戦争の悲惨さ

何の罪もない一般民間人を多数犠牲にした日支事変に引続く大東亜戦争、満州開拓移民として多くの日本人が寒冷の地で鋤鍬をふるい祖国日本のためと念じて働き続けた同胞の悲惨を思うとき、戦争は繰返してはならないとつくづく思う。

終戦の翌二十一年六月初旬、せめて病人だけでも日本へ送還させてやってほしいという日本人世話会の要望をソ連軍令部が聞きとどけたのか、我々元気な者が莚と竹で担架を作り病人を担ぎ貨車に乗せ、幅四キロメートルといわれた山中三十八度線を徒歩で、やっとの思いで越え、南朝鮮の注文津（チュウモンシン）から山口県仙崎港に辿り着いたのが六月末であった。

（田辺在住）

願意世界的平和

高橋　貞一（七七）

昭和二十一年十月二十五日、私は生家に通じるせまい上り坂の道に来て、ホット一息立止まって家の方を見上げた。そこには一人の老人が半ば口をあけ、なにか不思議なものでも見るような顔をしてこちらを凝視していた。言葉はない。出そうとしても出ないのかもしれない。私の後についてきているのは、リュックサックを負った六歳の長男、小さな包みをぶらさげた三歳の長女、そして生後七か月の女児を胸にくくりつけ、背中にリュックを負った妻、勿論私も背中には手縫いの大きなリュックを背負い、両手にはボロで包んだ荷物をさげている。そしてみんな汚れている。私もそれが親父とわかってもすぐに言葉はでない。勿論長男も長女もそれが誰なのか解る筈もない……。

そんな生家への第一歩だった。九月十日旧満州のC市を出て以来、四十六日目、斃れずによく帰ってこられたものだ。だが実際には感激も実感もない。頭の中は真空状態で、そのあと何をどう喋ったのかも記憶にはない。とも角一刻も早く畳の上で寝たかったことだけは覚えている。

※　※

ここで線路は破壊されている。これ以上進むことはできない。無蓋車から全員降りる。誰の顔も煤煙で真黒だ。一応揃ったところで徒歩行進だ。小学校六年生くらいの女の子が背中に赤ん坊を背負っている。その子が「オジチャン一寸赤ちゃんを見てやって」という。よしよしとすっぽり被われたネンネコをめくりあげて、のぞいて見てアッと息をのんだ。赤ちゃんは目を開けたまま、その目の中には埃がたまったままで、既に息

をひきとっているのだ。瞬間ネンネコを元にもどし、そのことを告げることもできず、ハイヨシヨシと声を掛けて、さあ元気を出して歩こうねと、ネンネコの背を軽くポンポンとたたいてやった。冥目……。

横抱きにぶらさげるような格好で、長女をつかまえて歩いていく。ふと長女の身体から力が抜けたような感じに驚いて、立止まり抱き上げてみると、顔面蒼白気絶寸前である。だが死なしてはいけない、とも角も生きて日本に帰らねばならぬ何も要らぬ、生かしてほしい。どこまで歩くのか、行列は延々と続く。

※　※

女や子供を中にして男達が周囲をとりまいた形で野宿。九月の満州の夜はもう寒い。そしてやけに星が美しい。今宵はどんな夢を見て眠れるか。日本の空はまだ遠い。この行進の途中で亡くなった子供達の土葬。……誰も一言の言葉もない。そして涙も出ない。ひたすら何かに祈るだけ。

※　※

開拓団の基地を出る時は、百十何名かだった。それがC市にたどりついたのは、たったの三名だけ。との報告を聴いた。これはひどい。日本人会としても、どうすることもできない。切歯扼腕するのみ。国策と云う名のもとに、そして置き去りにされたこの悲劇…。嗚呼…。

ここで一つ思い出した。当時友人であった中国人の王君が、いよいよ私達が引揚げる直前、かくれるようにして訪れ、言った言葉「Tさんあなたは戦争に負けたというけど帰れる国が、家があるじゃないか、私にはそれがない」と。

ともあれ戦争は文字通り悲惨である。もっともっと深刻な例は幾らでもある。絶対にやってはいけないのである。それは大抵の場合何かの名目をつけて、しかもある特定の権威または権力者によって実行され、無知の庶民はその大義名分に協力するという形で強制力に支配され、結局犠牲にされるのである。尊い人間としての生命すら護国という言葉によって、一片の紙の

如く捨てられてしまった過去の現実である。

再び訪れる人無き旷野の土に埋められた子供達、更に自分の手で命を断った大人、ようやくに故国に帰る船に乗ったのにその船の中で死に水葬にされた人達、そしてその遺族、みんな名もなき庶民である。今こそ声を大にして生命の尊厳と平和を訴えたいと思う。

（三山木在住）

中国新香訪の墓への慰霊。

私の満州引揚体験

安達　輝（八一）

昭和二十年五月二十八日福知山市天座から親子六人で、満州三江省依蘭県第二天田開拓団に入植しました。主人も甲種合格であり、入植後四十日目、現地召集でソ連の方へ行ったと聞きました。列車の中で一本の煙草も分け合うたと帰った人に聞きました。何日経っても音信不通、ただ生命あるように神仏にお祈りしました。心配ばかりの毎日です。

無条件降伏したのが十五日で、一家の柱を戦場に召された後、残された母子言葉に表せない苦難の毎日でした。団員一同ぬかるみの三里程歩き続け、婦女子や男の人は、四人位。行列よりはなれたら、荷物は持ってやると満人に取られました。コーランの畑の中より兵隊さんが三人来て下さって、B29が飛んでいるので一足早く、埠頭へ行きなさいと。着くと、もう日も暮れ、早く船に乗るように。乗って見れば、二個中隊の兵隊さんが船底へかくしてくれました。松花江をハルビンへ船は進みます。方正し通河開一番治安の悪い所で、夜十時から翌朝三時頃まで匪賊の襲撃に出合い、船の底も穴があき水がはいれば沈んで、全員水死していたでしょう。こわい目に遇いました。御飯は白いおにぎり、金平糖入りのカンパンを頂き命は助かりました。あの美味しかったことは今もわすれられません。

私が兵隊さんに、子供が行くのについてお礼に行きましたら、自分達は、大方九州からのお方、自分も同じ年頃の子供がいる。子供を見る度に我が子のように思います。明日は一緒にハルビンの埠頭へ上陸、お別れに兵隊様のおかげです、とお礼を申しました。道の真中へ二個中隊、兵隊さんお別れです、どちらへと尋ねます。鉄棒を四本組合せ置いて山奥へ行くと申されました。休みの間に私の子供の頭を刈っていましたら僕達も散髪をするので貸して下さいといわれ交替にしてお立ちになりました。私は塩の倉庫に「あんべら」をしいて毛布を一枚ずつ頂き一夜を明かしました。

そんな関係で平成二年シンガポールに一週間山下大将ほか堂守様がおられますので、教えて頂きお参りをしました。平成三年には沖縄へ三泊で皆様の御冥福をお祈りに京都府遺族会婦人部の皆様と行って来ました。私の主人は、シベリアアムール州ロストフカ地区第一分所で戦病死ということが昭和三十四年の最後の調査で分かりました。この日は十月七日、主人の誕生日です。草葉のかげよりお祀りをしてくれと教えてくれたと思います。

また思い出ですが、昭和二十三年に舞鶴埠頭に上陸された四国の松山様に、京都まで来て頂きました。十一年間わからないのは、府の調査が不十分であったことを私は民生部長様に腹を立てて申しました。十月七日、消息のわかった日、昭和六十年は全国引揚者会合が舞鶴であり一泊、六十四年は、舞鶴交化会館が十月に竣工し、参加させて頂きました。六十年会合の時はNHKより連絡を頂き、岸壁の妻として二人で港までタクシーで旅館まで迎へに来て下さった。私達もうれし泣きでした。船がつくと田端ハナ先生が一そう舟が目の丸小はたでお迎え頂きました。「只今帰へりました」と大きな声で泣いてばかりでした。

△新香訪から帰えるまで▽

敗戦による引揚者は、全国で何千何万人といいますが、現地で築いた財産は中国人にとられ、裸一貫で引き揚げました。食事も朝夕なんば粉のおじやで私たち五人で、はんごう一つ半しかないのです。この様子ですので栄養失調になって、一日に四十人ぐらい故人となられました。私も使役で毎日お墓まで運んでまいりました。私も自分の子供が指をくわえて見ています。お金なし自分もたべるのをひかえ、子供（一年生と三年生）たちにはたべるものがほしければ満人の子供に

行くか、死んでしまえと申しましたくらいです。人様のためには何でも寮長の命令で薪の運搬、男の人の中へ主人の服を着てゲートルを巻き作業に行きました。あくる日女がまじっている。明日からはあぶないから休むように言われました。十人ぐらい泊りがけで、クリーに行きましたが、あの時のお金は一日五十円。そのお金は総体本部、区本部、自分の頂くのは十五円。子供に一度お腹一ぱいたべさせてやりたいと思いましたが足りません。四月には雪がとけ、草が芽をふきます。いろいろの草をとりに行き満人の家へ木綿の布とお味噌を交換に行き、ゆでてごはん替りにしました。塩の食倉を出て、ハルビンの中学校で約一か月。三江省だけの集りです。女の人も髪は坊主頭で、歩いておられます。死人が多く、学校の広場も埋める所もなくなり、北満一の義勇隊の訓練所一区より十六区まで百人寮が六十四人ほどありましたので、そこへ変りました。山手の方へとソ連の大きな自動車に乗り、新香訪の収容所で、一年四か月お世話になりました。内地へ帰える話を聞きました。夏は暑いし、寒さはきびしく、着るものもなく、毎晩あちらこちらより寒いとさけび声、今日あって明日はない身体です。私も何とか子供と五人で帰ったのも、福知山では私一人、今でも残留孤児が来られますが、娘があの時置いておかれたら「探しにかへらなければならなかったな」と言って話します。この島より一週間、しけの中で船はゆれ、すわることも出来ず、九州の南風岬へ上陸しました。もう戦争はいやです。平和な日本が続きますよう。故人の方々のめい福をお祈り申し上げます。合掌。

（三山木在住）

戦争はもう、ごめんだ！

中川　久一（七一）

昭和十七年四月から二十年十一月まで、フィリピンのルソン島及びミンダナオ島に三年と八か月戦争のため駐留していましたが、敗戦のため帰国（捕虜となって）したのです。その間、色々の事に遭遇致しましたが、特に平和として強い関心を持っていたのは、戦争現地の住民ではないかと思います。フィリピンはその当時、アメリカ合衆国の植民地でありましたが、日本が南方資源を望むにより、フィリピンへ侵攻、そのためやむを得ず受けて立ったもので、アメリカ軍と日本軍の戦いであり、フィリピンの住民には関係のなかったものと思います。

しかし戦争のため一番の被害者は現住民であったと思います。その戦争のため肉親は銃撃や爆撃のために、その弾に当って死亡し、難を逃れるため右往左往とさまよい歩き、肉親とは離ればなれになって逃げるのに精一杯で、食料も満足にとることのできない状態。またそのほかいろいろの苦労の連続で現住民としては筆舌に云い表せない事態の連続であったと思います。戦争さえなければ、このような事態に巻き込まれることなく、平和に暮らせていたものをと思えば住民としては耐え難いことではなかったかと思われます。

このようなことは、ほんの一例に過ぎませんが、その他もっと悲惨な事も沢山あったのではないかと思います。私達軍人も敵の攻撃のはげしさと、それに対抗する武器もなく更に食料も欠乏の連続で、後退後退と、結局山の中に追い込まれ、食べるものもなく、犬、猿、猫、ねずみ、とかげなどを食べられるものはすべて食べた。それも底をつき結局、木の根、木の葉をあさっ

ていたが、塩がないため身体の疲労が増すばかりで、この上は敵の軍門に降るしかないと思い、降服したものであります。悲しとも仕方がなかったものです。沢山の戦友は食べるものもなく戦傷のため、病のため「天皇陛下の御為に」亡くなって行ったものは数知れず、悲しい現状でありました。戦争さえなければこのような苦しみもせずに済んだものです。フィリピンの現住民も楽しく暮らせたものと思います。

いずれにしても「平和」であってこそ人生の生き甲斐があるのではないでしょうか。もう戦争は御免だ。何時までも平和で楽しい社会であるように、願うのは私一人ではないと思います。おたがいに平和を築いて行こうではありませんか。

（三山木在住）

わたしの戦争。抑留生活体験

小西勇治（七一）

私は昭和十八年十一月一日、第一乙種にて兵庫県青野ヶ原中部第四九部隊へ入隊。一週間くらいだったと思うが、満州の斐徳戦車第十一連体第三中隊へ転属した。特に戦車運転教練は頭をじやんじやんたたかれ落ちつかず、夢中だったことが忘れられない。

一期の検閲の終った折、昭和十九年三月に動員命令が出て、何処へ行くのかわからない。貨車に乗って朝鮮の釜山へ着いたところ、暁部隊とわかり乗船待機。わが連隊は防寒具を返納せず、朝鮮海峡を渡り下関へ着き、それから外は絶対見られずに、着いた所が小樽だった。二日ほどの民家宿営のあと、一か月程はバレット兵舎生活で乗船待ちのようだった。この時、補充兵が入隊して来て私たちは二年兵気分だった。乗船して〝何処へ行くのやら〟何日間ほど、乗船していたのやらおぼえていない。敵機偵察と飯上げ当番が廻って来るだけ、風呂に入れずシラミがわいて来て、シャツの裏の縫目に一面についている。暇の時にシラミ殺しだった。

昭和十九年五月頃と思われるが、着いた所が雪で真白、目がぱちり、北極の感じで占守島（シュムシュトウ）だった。向いの島が幌莚島（ホロムシロトウ）で占守島より大きく、九十一師団司令部があった。ここにも暁部隊の船舶兵の活躍が見られた。占守島は、縦、八里、横三里程と聞いていて、無人島で、ただ缶詰工場らしいものがあって、製造シーズンだけ、日本人が来て働き帰るらしい。目照時間が少く、夏でも三時以降は湿気と冷えで冬には人間が飛ばされるくらいの突風が所によっては吹くという。半地下バレット兵舎へ入って五月、六月頃でも吹いた。野菜は

乾燥物ばかりで、栄養不良になる。飛行機は時にしか飛んでこない。戦車戦闘配置用壕堀りと演習で過ごした。アッツ島玉砕は閃聞していた。

昭和二十年八月十八日未明、占守島三領山の麓に戦車十一連隊は、対ソ戦闘配置につき、交戦したが、池田連隊長以下、陸士卒将校は、戦車より身体を出し戦死した。戦死者九十六名と発表されている。この時、敵機襲来、整備班は塹壕の中へ入り、ただ命あるを願うのみ。終戦の報にて残念で涙が出て魂が抜けたようだった。時に年令二十五歳。武装解除後、捕虜編成は旧日本軍の連隊、中隊、少隊そのままだったのでよかった。旧日本軍下士官以下で、将校はシベリアへつれて行かれたように聞いていた。作業は占守島より幌筵島で短期間、清掃雑役で、ノルマはなかった。草を缶詰の空缶で炊いて食べた。

その後樺太の珍内へつれて行かれ、森林伐採作業。ノルマがあったが、少年戦車兵の人と同じ組で助けてもらったようだった。バラック建宿舎で廻りは柵をめぐらし番兵が、マンドリン型銃を持って番をしている。雪積りは浅い方で、宿舎から伐採地迄は、二キロくらいだったと思われる。毎日ノルマ完遂で宿舎へ帰れるが、食がまずしく少いので涙が出た。楽しみは寝ることだった。人間の欲望はアウト、ただ生きる精神力のみ。あわ飯で湯呑茶碗一ぱいくらい、時には、黒パン一にぎりくらいだった。

一年くらい経過してから作業が替り、貨物船のハッチの中でトビを使って、イカダで貨物船まで着け、ウインチでつり上げて来た丸太を整然と置く作業であった。森林の伐採より面白味や楽しみがわいてきた。シベリアの抑留は、寒さと、食事と、作業ノルマ等がもっともつらく苦しいことだったと思う。栄養失調になり昭和二十三年六月二日に復員し舞鶴港へ着き家に帰った。こうした戦争と抑留生活の忍の体験をしたことをふりかえり、平和な生活の尊さを後世に伝えたいと思う。

（三山木在住）

捕虜として送られた時

小田　秀一（八四）

私は捕虜として奉天よりソ連に送られる、汽車の中で、知り合った人は抗突小尉でした。私に親切にして下さるので、仲良くなった。私もこの人を信頼して、私の食事半分をこの人に食べて戴いた。ソ連に着いた時、この人はロシア語が上手で、収容所長まで昇格された。立派な人でした。何かと私と話が合い、使役に出る時、必ずこの人に伝えて出た。職場でロシア人の奥さんが持っていたパンの半分を私にくれた。私は戦友に分けてやろうと、弁当箱に入れた。これを見たロシア軍人は賞罰とし手帖に書いた。悪行すれば、朝の点呼の時に皆の前で発表され、犯罪人扱にされるところを少尉殿に報告した。「よし僕が何んとかする、心配するな。」と言って安心させて下さいました。この人はロシアの収容所長が信頼して業務計画表を作ったり、水道布設計画表や作業計画も指導するような重要な人でした。得意なロシア語で、私の事を逆に、褒（ほめ）てロシア語で所長に話して下さったので罪を逃れました。この人は、収容所長に任命されました。私等の部隊は職務上明白にしない様に注意されました。

奉天で在郷軍人集まれの命令で、すぐ帰る積もりでかんかん帽子や麦ワラ帽子の人が集まった。ソ連軍隊が取り巻き帰さない。収容所に入れられ、軍服を着せられ我々と混合隊を作りました。一番最後でしたので、憲兵も混成隊で、汽車に乗り、飛びおりる人もありました。私は車輛長でした。一車を点呼して人がたりないと、食事が止ります。真黒な夜に飛ぶ、銃声が闇夜にひびく。無事に逃げたか心配。汽車は何も知らずに走る。混合部隊ですので、中々作業もむつかしい。仕

事はアライカントモラ。ヨロシタチスト。馬が十六いた。腹がへって、仕方ない。馬のところへ行けば、良いと、馬車に乗った。道の悪い雪の道を前の馬が走れば、走る。車は横になる。死物狂いでしがみつく。兵舎に帰り寒いから防寒服も着たまま。足の防寒靴も脱がずにころげて寝てしまう。その晩凄い腹痛が起り玉のような汗が流れた。医師の注射も効無く朝六時、針を入れ、漸く止まった。

それから収養所長が、「君シュバ工場へ行け。」という、場内は暖かだ。出来あがったシュバを運搬する。十人一組で九人はロシアの婦人で親切に教えてくれた。この工場は、三交替で晩十時より、朝の五時までである。終ると次はロシア人ばかりです。汽車二十輌くらい。毛皮が満載です。皮に肉が、指ほども附着している。これをつめで起して、食べました。我々は夜中ですが、職場へ着けば、良いが着くまで五キロほど氷の上を歩かねば着かない。幾度かすべって頭を打つ。中には気を失い皆がかついで帰ったこともあった。それからバイカル湖附近の収容所に移った。何と言っても、M大佐の一行です。収容所に入っても丁寧に入れてくれます。車でレンガの運搬をし、「ノルマ取り」が点をつける。私は六〇点でした。働くことにより食事の量がきめられます。ここまで来ると同じ隊の戦友は、皆無くなり、青森県の伍長のY君でした。また長崎の戦友とかいろいろな集りです。だんだん仕事がなくレーニン、スターリンの革命の話ばかりです。しばらく滞在すれば、今度はウラジオ収容所。いよいよ帰れると思う。身体検査があり消毒や持物の点検をされる。時は昭和二十二年六月半ば、いよいよ船に乗る。船の中は米のかゆ。初めて米を目にした。舞鶴港に入港の時わが日本の景色をみて何と喜んだことか。

（大住在住）